

## ◆金鶴泳日記抄

一九六五年(昭和四〇年)

二七歳

いま この  
まっ青な鳥は  
力なく はばたき  
息も 絶えだえに  
冷えてゆく胸をいだし  
暗い恐怖  
絶望の吐息にふるえている  
——どこにも道がない  
暗黒の谷間で

林和「暗黒の精神」

吃音者の憂鬱

一〇月一日(金) 晴れ。  
乾いた涼しい風が吹く。早朝などは肌寒いくらいだ。

一〇時から六時まで研究室。POK-2の後処理。  
疲れることは、淋しいことだ。  
「自分の、ほんとうの主張を、はっきりと発見すること」  
「他人が語る既成の思想が自分の主人公ではない。自分が  
思想の主人公なのだ。」(山田宗睦)

明確な人生の目標も希望も方途もない。見通しが無いと  
いうその重さを感じながら、噛みしめながら堪えるように  
一日一日を生きている。空しさ、物悲しさが、つきまとう。  
一〇月一四日(木) 雨。  
いつもより三時間も寝過ごして、今朝、起きたのは九時  
だった。よほど疲れていたのであろう。起きてみると、雨  
だった。

暗い。  
今日は一二時半から六時半まで研究室だった。  
重く息苦しかった。得体の知れない圧迫感に、今日も苦  
しめられた。神経が少し弱っているといったふうで、神経

衰弱に陥ったかのような、正体の知れない恐怖感に悩まされた。

また少し吃音がひどくなっているようで、それがいけならしい。

言葉、会話に対する「恐怖感」とでもいったものが常に潜在的にあつて、一人でいるとき、家にいるときはそれを全く感じないのだが、他人の中にあるとそれがにじみ出てきて、精神を圧迫するらしい。朝の一〇分間をでも、発声練習、呼吸練習とかに、あてるべきかも知れない。そういった試みは過去に何度も、しかも長期間試みたことのあるものだが、そしてこれといった効果の見られなかったことなのであるが、しかしそれでも、やらないよりはやった方がましかも知れない。

化学がたえられないとは、すなわちこの圧迫感がたまらない、ということかも知れない。

私が文学に興味があるのは、文学が常に人生をテーマにしているからであるが、私が文学することに興味があるのは、それは文学が孤独な作業であるからである。

毎朝、起きてから、冷水摩擦、あるいは湿布摩擦をするのが習慣になってからすでに半年ちかくなる。朝食の前の二時間余りを文学するようになりだしてから一年ほどになる。それと同じように、その朝の時間の一〇分間を、ちよつとした発声練習に当てることを習慣にしたら、どうで

あろうか。それを一年、二年と続けていったときには、バカにならない効果がでてくるかも知れない。かつて、大学一、二年のころ、一五分間ほどの腹式呼吸練習を、一年、二年ほど続け、それでも別にこれといった効果もなかったのだが――。これに関する効果はむずかしい問題だ。しかし、そうすることは、精神にある種の緊張を与える意味でも、無駄ではあるまいと思う。

何々でなければならぬ、ということはない。それを教えるのが文学であるはずだ。種々な形の人生があり、そしてあつていいのである。せまくるしい考えは、いけない。

吃音に悩まされるということは、これは下らないことだと思う。その下らないことに悩まされているということが、また、なさないものである。この種のことについては、あまり書きたくない。

夜、  
雨足の音。

自分の最も気の向いていることに専念したいものだ、とつくづく思う。最も気の向いていること、――それは文学である。

ことがあつたら、私は化学を放棄するであろう。そして文学に専念するであろう。ことがあつたら――。

等々いろいろ考えると、全く気が滅入ってしまう。

一〇月二四日(日)晴れ。

秋日和で、ぼかぼかと暖かい。

「途上」の書き改めを終える。二一九枚。こんなものを書いた、という程度のもので、来月八日の「新思潮」同人会に一応出してみるつもりだが、掲載されるかどうかおぼつかない。だめだったら、小金井文学会の「中央線」にいつか載せようと思う。これはこれでもうどうにもしようがないと思うので、たとえ拙いものでも、とにかく活字にしようと思う。この作品から手を切るために。

コーヒーと煙草のみすぎで気持が悪い。

夜、貞順来る。明日明後日、朝鮮大学で何かあるということ、二、三日泊まっていこうらしい。

新町の家のことを聞くと、たちまちにして〈不安〉に陥る。何でもないちよつとしたことを聞くだけでも。他人の目にはいざしらず、〈家〉は、私にどんなに気を重くさせる暗いものとして映ることか。

一〇月二八日(木)晴れ。

「……作者がその作品を、自分の生活の一部を以て作ったのでないなら、自分の情熱を語っているのでないなら、あつさり筆を折るがよい。わたしが見たいと思うのは、一冊

一〇月二五日(金)晴れ。

縦書きがいいか、横書きがいいか、――そんなことにもついつい思い迷う。

「暗夜行路」を三年半ぶりに読み出した。しかし、文庫本で百六十頁ほど、「第一部」だけ読んで、あとは止めることにした。退屈なのである。私をして、文学に開眼せしめたもの、それは、まさしくこの「暗夜行路」なのであった。

なぜそんなに感動したのであるかと、いま思うと不思議である。ちつとも「暗夜」が感ぜられない。何が暗夜か、と思う。気分不快を言っているにすぎない。要するにゼイタクにすぎぬことだと思う。どかが「名作」か、さつぱりわからない。下らない小説である。

このところ神経がふつうでないのは、あるいは吃り易いのは、声が詰り易いのは、身体が本調子でないせいもあるだろう。疲れ易い。朝の寝覚めがひどく悪い。

このところまた晩酌をはじめているのだが、まだアルコールはいけないのかも知れない。少量といえども、翌日の身体にこたえるようだ。

いろいろなことを考えると、気が滅入る。途方に暮れる。実験のことや、文学のことや、吃音のことや、家のことや、生活のことや、朝鮮のことや、じぶんという人間のことや、

の本が、一つのアヴァンチュールの説話が、それ自身、その作者にとって最も大切なアヴァンチュールであることを感じさせるような、そのような気合である。真の作品は、人間に關したものではない。個人に關したものでもない。それは人間の個人的な表白なのだ。」(マルセル・アルラン)

「小説とは、作者がよく知り考えた人間生活の現象を通して人間の感動の实体を捕えようとする言葉の芸術である。そして通俗小説とは、人間の形骸を組み合せて面白く作った模様の工芸である。」(伊藤整)

朝の読書(六時〜八時一五分)

セルヴァンテス「ドン・キホーテ」

講座・現代の哲学・「実存主義」

E・Aポー小説全集第・巻「ゴードン・ピムの物語」

伊藤整「小説の方法」

憂鬱の感情に包まれがちである。虚しい。

「実験は闘争である」と、四月のコンパのときに永井教授は言った。「実験は自己との闘争である」と後藤助教も言った。じっさい、実験は闘争である。実験は虚しく、その虚しさとの闘争なのである。

家にいるときの私と、研究室にいるときの私と、一種別種の人間になっているようである。自分でも自分を、全く話すことをせぬ、奇妙な奴だと思う。研究室にいるときに苦痛である。

まあ、とにかく、来年の三月まで耐えてみよう、そのときになってもなおかついまのこのような状態が変わらないのであったら、そのときには化学は、実験は、やめてしまおう方がいいであろう。

——そう思うのであるが、じつは、明日にでも止めたい気持なのである。

3、3—Oxetane Dimethanolの合成は、どうやら旨くいったようだ。じっさい、私のいまの実験で、いちばん手こずっているのは、このモノマーの合成のところなのだ。

このところ、毎晩晩酌をしている。いつもは酒二本なのだが、今日は四本であった。じっさい、酒でも飲まずばやりきれない気持なのだ。酒を飲むことによって、厄払いをしている。

永井教授は私にはたえられない。

何かことがあったら研究室を止め、退学することになるかも知れない。この道を進んでいったとしても、いまのところ、この道に希望は感ぜられない。朝鮮に帰国するのではないならば、在日朝鮮人は、化学などしても仕方ない気がする。

全く、私はなぜこのような思いをしながら実験を続けているのであろうか。一思いに止めてしまふ、いままでもかくも歩みつづけた道(この道がいったい自分をどこに連れていくのかわからないのだが)、そこから外れることが、恐いのであろうか。その勇気がないのであろうか。

一日において、最も心の充実していて楽しい時間は、朝起きて飯を食うまでの、文学している二時間余りである。最も虚ろなのは実験しているときである。これが七〜八時間もあるのである。

疲れて帰る。

吃音がどうもいけない。息苦しくする。

一月五日(金) 晴れ。

五時四五分に起きる予定が非常に疲れていたものと見え、夢をさえ見ずに、熟睡して、七時に起きた。

たとえどんな寝坊しても、起きてから、研究室に出かけるまでの間の三時間余は、確保しておかねばならぬ。文学する時間は確保しておかねばならぬ。それから吃音矯正練習のための三〇分も。研究よりも、私にとっては、それらの方がよりずっと大事なのだから。だから一時間寝坊すれば、研究室に行くのが一時間遅くなるということになる。

実験は、たえがたい。性格的、神経的に、たえがたい。

一月八日(月) 曇り、夕より小雨。

夜、七時から新宿「もん」での「新思潮」同人会に出る。第四号のための原稿「途上」を出す。この「途上」には、ほとんど自信をもっていない。稚拙が目立ち、恥ずかしく思う。出したそばから身内が熱くなる。へんだ、こりゃあ。「新思潮」の会合に出たのは四月初旬以来だから、七カ月ぶりである。一〇時、帰る。

一月一日(木) 曇り、時に晴れ間。

朝が冷えた。寒波だそう。昨日からコタツを入れた。生きるとはどういうことなのか、そんなことが思われる。虚ろな日だ。何事もない。しかし希望もない。ただ昨日に続く今日を生きるだけだ。

「自己変革から社会変革へ」。しかし、一生自己変革に終始する者もいるであろう。

一月二日(月) 晴れ、後曇り。

今月一日から、朝のひとときを吃音矯正のための時間にあてているのだが(その記録は日記別冊に記してある)、それにもかかわらず、このところ、妙に吃音が昂じている。今日もまた、研究室で、ひどく吃った。吃音者の悲哀を、今日も、しみじみと舐めさせられた。教授に会ったのだが

(特許の件で)、そのときにも私は何にもしゃべれず、中島氏がしゃべっていた。私の研究であるにもかかわらず、あたかも中島氏の研究であるかのように。私の研究を、氏のエゴのために利用している、利用しようとしている気色が露骨に見えるときには、じっさい、苦勞して実験しているのが、全く、ばかばかしいことに思われる。化学は私にとって何であろうか。そんなことをいろいろ考え併せると、明日にでも実験を止めてしまいたいような思いである。そしてじっさい、明日にでも止めかねないところである。在日朝鮮人は、化学しても仕方がない、という意識と、もうひとつ、吃音であるかぎり、化学してもはじまらないという意識がある。そうだ。吃音はぜひとまなおさなくてはいけない。来年三月になっても、いまと全く相変わらずであるとしたら、そのときには化学なんぞは止めてしまおうことだ。

半月余り前から、「吃音者の告白」(仮題)を書きはじめている。私はこの中で、吃音者特有の心理を、克明に描きたいと思っている。そして私はそれを描けるはずである。二、三カ月ほどかけて、一〇〇枚ほどのものにする予定である。

明日は、祝日で、休日である。明日が休みであることは、じつにほっとすることである。

かなり強い雨が、一日中、降り続いた。

研究室に行くつもりで家を出たのだが、小金井から新宿までの電車の中で、居眠りをした。はっと起きてみると、もう新宿だった。身体が非常に疲れているといった感じだった。実験が億劫であった。精神的に〈ガタ〉が来ているといった状態も相俟っていた。で、今日も研究室を休んだ。本郷中央図書館で、アルベール・テイボーデ「小説の美学」一冊を読んだ。五時まで。

帰り、少し雨に濡れた。そのせいか、夜、熱が少し。しかしそれも風呂に入り、よく暖まると、干いたようだ。

本郷東大構内は、生産技術研究所の、どこかうそ寒い機械的な沈滞を感じさせる退屈な空気とちがって、何と自由で解放的な空気に満ちていることか。そうだ。そこにはまさしく、人間の精神が充ち溢れているといった感じだ。

文学、あゝ、文学！

一月二七日(土) 晴れ。

今朝、降霜が見られた。

土曜なので、実験は三時で止める。四時、四谷で妻子と落ち合い、新町に帰る。むろん、帰りたいから帰るのではない。いや、帰るのが、いつものように億劫で億劫でなら

吃音矯正練習に力を入れること。これまでやってなおらぬものは、もうなおらぬものとして諦めるよりしようがない、というほどにまで努めてみることに。来年の三月まで。

一月二四日

吃音を何とかして駆逐しなければならぬ。

来年の三月までの四カ月間、格闘の日々が続くであろう。そうだ。それはまったく格闘にほかならない。やるかやられるかの格闘。自分を表道の人生に引き出すか、やられた者として裏道の陰鬱な人生を生きることに甘んじるかを決する格闘。

それは虚ろな実験をすることの、その空しさとの格闘。そしてもう一つ、吃音との格闘。そしてその二つの格闘の間で、文学の修業を積み重ねなければならない。その格闘の日々がこれから四カ月間続くであろう。勝か負けるか。私の人生の一つの岐路であろう。

一月二五日(木) 雨。

昨日は非常に疲れていた。疲労はいけない。吃音矯正上からも、それは非常にいけないことだ。過度の性生活は慎しまねばならない。心身は常にベスト・コンディションに保っておかねばならない。身体の疲れは、精神にも伝わる。そしてそれは、吃音をいっそうひどくする。

ないのだが、しかし、金がもう全くないのだ。ただ一カ月分の生活費をもらうために、憂鬱でならないのだが、それでもどうしようもなく、帰るのである。父のスネをかじっているかぎり、この気の滅入る帰郷は続くであろう。

七時半ちかく新町に着く。

静愛が朝鮮に帰国してから、ちょうど一年になる。私はふだん、雅代や静愛のことを忘れていた。妹らについては、もはや心配することもないだろうし、妹らも、むしろ私より強い人間だと、そう思われるからである。帰国した妹らのことよりも、私にはむしろ、家出したまま行方知れずになっている和代の方が、よりしばしば思い起こされる。あの内気な、まったく引込み思案な和代が、いま、どこで、どのように生きているのであろうと、ふとした拍子にふと思われる。

三島由紀夫「金閣寺」を読み終えた。その華麗なる文章に魅惑された。

一月二四日(土) 曇り、後雨。午後、晴れ。

目覚めたら、すでに九時だった。

このところよく寝過ぐす。身体が本調子でない。酒とコーヒーをしばらく止めてみてはどうだろうか。湿気を含んだ風が吹き、鬱陶しい日だった。身体の調子